

くらし

20周年迎えるしまね映画祭

映画を観(み)る、という行為はコンサートや演劇、舞台などを見に行くのと似ている。実にアナログだと思ふ。同じ場所や空間、そして時間を多くの人たちと共有し、楽しむのだ。祭りなども同じで、時間を合わせて出掛けていく、という点が共通している。だから部屋でレンタルビデオや、インターネット放送などを観るのはわけが違ふと思ふ。

誤解を恐れずにいえば、いつでもどこでも自分の好きな時間に、誰に干渉されることもなく部屋着で観ら

錦織監督
映画の現場から



●●●●
10

れる映画は実は「映画」ではない。言い換えれば本来の映画の楽しみ方ではない。劇場に足を運び、暗い中で隣の人の息遣いや反応を感じながら、観るのが映画であり、みんなでドキドキわくわくしながら観るのが本当の映画観賞だと思ふ。

映画は世界中の国で作られているが日本で上映される洋画はほとんどがハリウッド映画だ。イランやアルゼンチン、パキスタンなどの映画はもちろんのこと、多くの国の映画を日本人は(私も含めて)ほとんど観たことがないのではないだろうか。実にもったいない話だ。

劇場にかからずとも、DVDやブルーレイで楽しむことができる作品は少数ではあるが、存在する。しかし、映画好きにとって劇場で観てみたくなるのが心情だ。

島根ではさらに観られる映画は少なくなる。何とかできないものか?との思いでいろいろな立場の人たちが集まり、劇場のなくなった地域に映画を届けよう、と始まったのがしまね映画祭。何とこの映画祭が今年で20周年を迎える。スクリーンでいい映画を県内に届けたいと、島根のあちこちで「上映」を続けてきた多くの人たちに敬意を表したい。

3カ月にわたる長〜い映画祭は多くの熱心人たちの手によって今年も健在だ。映画祭から生まれた映画塾も参加する人たちが年々増加、県外参加も増えている。映画館が消えた街でも頑張るぞ!と気を吐く映画祭と映画塾に集う魅力ある人たちについて次回語ろうと思ふ。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載



2010年「しまね映画祭」ポスター。こゝし20回を迎える